

# 底流に毛沢東政治への批判

## 天安門事件の背景

中 嶋 嶺 雄

起こるべく潜在していた事態がついに爆発したような気がする。四月五日、北京の天安門前広場で発生した民衆暴動は、その性格からして社会主義国家に前例を見ないものであり、中国にとっては、かつての紅衛兵運動とも根本的に性格を異にするものである。いわば、毛沢東政治の内部矛盾とその深刻な亀裂状況をそのまま反映した騒乱であり、それが周恩来亡き中国に起こった「走資派」批判のキャンペーンのただなかにおいて生じ、ついには鄧小平副首相の解任と華国録首相代行の首相就任（七日夜、北京放送）に至ったという意味で、今回の事件は、中国内政の将来にも決定的なインパクトを与えたものといえよう。

この暴動に加わった天安門前広場の群衆に対しては、「少数の下心のある階級敵と悪人が、清明節を利用して毛主席と党中央に矛先を向けたものであり、これにだまされないように」との呉徳・北京市革命委主任（北京市長・党中央政治局員）の警告が繰り返され、翌六日の『人

民日報』社説「闘争の大方向をしつかり掌握しよう」は「階級敵がデマをふりまき、事を起こし、大衆を挑発して大衆とたたかわせている」旨を強調して「右からの巻き返し」との断固たる闘争を呼びかけ、今回の事態を「反革命」事件として処理しようとしているが、今回の事態にはきわめて根深い問題が複雑にからみあっているように思われる。

### 一月の花輪撤去事件

まず第一に指摘すべきことは、今回の事件の発端と近似した出来事が、去る一月一九日にも起こっていることである。従って、今回の事件を考えるには、このあたりの事情から説明せねばなるまい。

一月八日の周恩来逝去ののち、一月五日には盛大な追悼式（葬儀）がおこなわれ、鄧小平副首相が全参加者を代表して弔辞を読んだ（このとき以来、鄧小平の姿は公衆のまえに現れていない）。この鄧小平の弔辞は、まさに「悔い改めな

い」旧実権派の立場から周恩来の革命の事跡を総括したに等しく、中国革命の諸段階における周恩来の功績についてはきわめて詳細に触れているのに、解放後、とくに文化大革命の時期にかんしては、ごく抽象的に触れているだけで、しかも最後には、「わが国を近代的な社会主義の強国に築きあげるため」に奮闘すべきだ、と強調して、まさに『周恩来路線』（さしあたり昨年一月の第四期全国人民代表大会の周恩来政治報告を想起すればよい）の継承を誓うかのように弔辞を結んだのであった。この事実が、冠婚葬祭に敏感な中国人の意識構造において、そもそも鄧小平が全員を代表する弔辞を読んだこととともに、いわゆる文革派のリーダーたちを苛立たせたように思われる。

はたして、周恩来葬儀ののちにも、亡き周恩来を悼んで全国各地から天安門前広場の人民英雄記念碑前に捧げられた花輪が、一月一九日夜に解放軍兵士によって撤去されてしまったのである。この事実

の事実を重視し、「走資派」批判の核心を衝く事件として二、三の小論で言及したばかりである。つまり、この時点からい

わゆる文革派は、亡き周恩来への大衆的な哀悼と敬慕の念の噴出を苦々しく感じていたものと思われる。そして一月下旬には党中央の重要会議が開かれたものと推定され、後継首相の選定問題では第一副首相の地位にあった鄧小平の昇任が実現せず、いわば妥協的な暫定人事として華国録首相代行が決まり、同時に、「走資派」批判のキャンペーンが高まっていたのである。しかも、この時期以降、文革派の手中にあると思われる『人民日報』や『紅旗』などのマスメディアには、周恩来追悼の記事や論文が掲載されなくなり、たとえば周恩来死後初刊行の『紅旗』二号（二月一日付）には、周恩来追悼の論稿は一切なく、日本語でも出ている『人民中国』四月号は、周恩来追悼号のはずなのに表紙には毛沢東の詞だけが大きく刷りこまれていた。しかも、上海で編集発行されている文革派の

『機関誌』とも見なされ得る『学習と批判』第二号(二月四日付)に目を転ずると、「折中主義は批判されなければならぬ」と題する閑良・姚坤署名論文が目立ち、いかにも周恩来批判を意図しているかのようであった。

こうした状況のなかで周知の「走資派」批判が展開されてきたのであるが、その批判は、主として清華大学や北京大学の壁新聞、『人民日報』『紅旗』などのマスメディア、工業分野では大慶油田、農業分野では大寨生産大隊、軍では瀋陽部隊など、主に文革派の拠点ないしはモデル地区でのみ展開されたにすぎず、各生産点や、中隊以下の末端軍単位などへは拡大しなかった。三月中旬以降は、むしろ「走資派」のままかえしが各地で伝えられ、「走資派」の潜在的基盤の根強さが示されたのである。

### 「走資派」の真の正体

「走資派」とはなにか。それは文字通りの「Capitalist Roaders」なのか。私自身は、いわば毛沢東政治への内部的な批判と抵抗の総体だと考えているが、文化大革命以降、林彪翼変を経て「批林批孔」運動、『水滸伝』批判と相次いだキャンペーンの末には、はたまた周恩来の死の直後の「走資派」批判であるだけに、中国の民衆は、このような政治の歩みにある種の恣意性を感し、相次ぐキャンペーンへの拒絶反応を示しているように思われ

てならない。そして、今日の中国が置かれている内外の条件を冷静に直視すればするほど、「走資派」批判で「反面教師」のようにしてはつきりと教えられた、もう一つの路線こそ、中国の選ぶべき道ではないのかという懐疑が広まったとしても不自然ではない。つまり、文革派は「安定団結」よりも「階級闘争」を鼓吹するけれども、大衆は、いまこそ「階級闘争」よりも「安定団結」を欲し、中国の経済建設の前進と生活水準の向上を望んでいるように思われる。しかし、マスメディアを文革派がおさえ、毛主席という不可侵の対象が背景に存在するなかで、このような大衆の心情を吐露すべきハケ口がなかったといえる。こうして清明節に亡き周恩来をしのぶかたちで集まった大衆は、「走資派」批判が周恩来批判へとつながってゆくことに不安を感じていた矢先、大衆の要求とは逆に官意によって花輪が撤去されてしまったことを知らされたとき、もはや彼らに残された道は「反乱」しかなかったのではあるまいか。

とはいえ、中国のような国家体制のもとでは、数十万の大衆が清明節に相集い、うち数方が暴動まがいの騒乱に参するなどということがまったく自然発生的に起こり得るはずはない。この点については、『人民日報』自身がはやくも「階級敵の策謀だ」と認めている(四月六日付社説)。それだけに、事態は深刻であるのだが、今回の事件を通じて明らかに

### 周恩来礼賛の持つ意味

なったことは次のような問題であった。第一は、いわゆる「走資派」批判に周恩来批判が含意されていたことがほぼ明らかになったことである。このことは、たとえば、「走資派」批判の急先鋒であった清華大学の学生が「なぜ周首相に反対するのか」と群衆から暴行を受けた事実(共同電)や、『文匯報』(上海)が周恩来批判をおこなったらしいことに対する反批判が、去る四月一日に北京駅に停車していた列車にベンキで書かれていたことなどによっても傍証されようが、だとすると「批林批孔」運動や『水滸伝』批判にも周恩来批判が含意されていたことを意味するであろう。つまり中国の路線闘争の根はきわめて深いものだといわなければならない。

第二には、毛沢東体制下での今日のよいう大衆的な周恩来礼賛のもつ意味についてであり、天安門前広場で「周首相の写真を碑につり下げたときには歓声とインターの合唱がわき起こった」(朝日・田所特派員)といわれるような現象は、ある意味で毛沢東批判を意味しはしないだろうか。毛沢東個人への批判ではないにせよ、毛沢東政治ないしは毛沢東家父長体制への批判が、つねに国家的使命感に立脚して行動した政治家であった周恩来への追慕とともに発露しているように思われる。 みねお

従って、第三には、そのような毛沢東体制下において、政治を「私物化」していると大衆が考えた人物、つまり江青夫人への批判がすでに露呈している問題であろう。思えば中国の今日の政治過程における江青夫人の役割についての批判は、これまでにも一貫して潜在しつつあったものである。「批林批孔」運動の過程でも則天武后や呂后の例を引いて暗に江青夫人を批判する論調があったが、今回の暴動に際して、一九三〇年に国民党に虐殺された毛沢東の最初の夫人・楊昌慧(毛沢東の恩師・楊昌済の長女)への敬意を表す者もいたとの報道(AFP電)や、「真のマルクスレーニン主義を骨抜きにしようとして、ハサミを振り回すやからをわれわれは粉砕する」とのスローガンがあらわれたこと(朝日・田所特派員)などは、明白な江青批判だと考えないわけにはゆかない。

中国は、まもなく毛沢東以後の時代へと移行してゆかねばならないだけに、とくに文革派にとっては時間とのたたかいがいよいよ大詰めである。そのような時期に起こった今回の事件は、社会主義の政治においても人間の好悪や愛憎、慕情や怨恨がいかに初原的な要素として政治を動かすかを知らしめたという点で、きわめて象徴的な、そして中国的な出来事だったといえよう。それだけに、中国の将来にはなお予測しがたい政治の流動があり得るように思われてならない。

(なかじま)

・東京外国語大学助教授

報道  
解説  
評論

# 朝日ジャーナル

1976  
Vol.18  
No.15 180円  
4・16

ロッキード疑獄特集

曝された日米体制の深層 富森叡児

不起訴でも高官名は出せる 藤木英雄

米側資料と日本の検察 野村二郎

国鉄を蘇らせる道 高木文雄／安岡章太郎



昭和三十四年三月二十日第三種郵便物認可  
昭和三十四年三月十四日因鉄東局特別扱承認誌四五三号  
五十二年四月十六日発行